



HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	知床ナイト : 伝説の水中写真家とともに, 神秘の半島のいまと未来を考える夜
Author(s)	平本, 健太; 関, 勝則
Description	セミナー
Citation	地域経済経営ネットワーク研究センター年報, 15, 37-39
Issue Date	2026-03-31
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/99301
Type	departmental bulletin paper
File Information	REBN_15_037.pdf



<セミナー>

知床ナイト：伝説の水中写真家とともに、 神秘の半島のいまと未来を考える夜

報告者：地域経済経営ネットワークセンター長 平本 健太

講演者：関 勝則

2025年6月28日（土）に、<知床ナイト>「伝説の水中写真家とともに、神秘の半島のいまと未来を考える夜」と題するセミナーを開催しました。本セミナーは、知床半島がUNESCO世界自然遺産に認定されて20周年となる節目に合わせて企画したものです。

講演者には、著名な水中写真家であり「知床ダイビング企画」社長の関勝則さんをお招きしました。聞き手はセンター長の平本健太が務め、終始和やかな雰囲気の中で進行了しました。関さんはスキューバ・ダイビングのガイドとして四季を問わず年間200日以上潜水する、文字どおり伝説的なダイバーです。NHK「ダーウィンが来た」をはじめ、さまざまなテレビ番組への出演も多く、知床の水中・陸上に関する貴重な写真や映像データを各種メディアに提供しています。さらに、水中写真の作品展や講演活動も精力的に行っており、知床の自然を語るうえで欠かせない第一人者です。

当日は、関さんがこれまでに撮りためてきた膨大な作品のなかから、厳選された160カット以上の写真を投影しながら、知床半島の大自然の魅力とともに、気候変動やオーバーツーリズムなど、複数の視点から現状と課題が語られました。

冒頭、関さんからは次のような問題提起がありました。「かつては“黒い川”と例えられるほど、知床の秋の河川にはカラフトマスが遡上した。しかし近年、気候変動による水温上昇の影響で個体数が年々激減している。かつてはカ

ラフトマスが大群で遡上するので、1匹だけを撮影するのがとても難しかった。いま思えば、贅沢な話だ」。この言葉とともに、新旧比較の水中写真が示され、会場の関心を強く引きつけました。

続いて紹介されたのは、カラフトマスを捕食するヒグマ、雪の積もる川を遡上するシロザケ、オショロコマの大群、藻場に生える海藻類、滅多に見られないオオカミウオの幼魚、タラバガニがピラミッドのように積み重なる光景、トドの大群など、多彩で芸術性の高い作品群です。作品が映し出されるたびに、会場からは歓声が上がりました。

こうした作品の紹介に合わせて、知床の自然が過去数十年で大きく変化してきた事実も、具体例とともに語られました。たとえば、かつては人の姿を見ると一目散に逃げていたヒグマが、近年では人に慣れてしまっていること。道路の舗装が進むことで泥が海中へ流れ込み、昆布をはじめとする海藻に堆積して悪影響が生じていること。卵を抱いて孵化まで親が守るササキテカギイカが、最近では1シーズンに数回しか観察できなくなっていること。さらに、かつては当たり前に見られたスルメイカやサンマの大群が、現在ではほとんど見られなくなっていることなどです。

羅臼と北方領土である国後島との距離はわずか30kmほどですが、その間には最深2,000mの深海が横たわっています。海面近くの水温が深海と変わらなくなる冬には、1,000m以深に

棲む生物が浅い場所まで上がってくることが可能になります。このため羅臼の海では、他の地域ではまず観察できない深海生物に出会える機会があり、「奇跡の海」と呼ばれる所以でもあります。当日は、羅臼ダイバーのアイドルであるアバチャン、発光器をもつキュウリエソ、滅多に見ることができないダルマコンニャクウオ、愛らしい姿のダイオウキジンエビなども紹介され、参加者の知的好奇心が大いに刺激されました。

関さんがお住まいの羅臼町は、冬期間に流水が着岸することで知られています。数十年前は、早い年だと12月末から、遅い年だとゴールデンウィークの頃まで流水で海が閉ざされたそうです。流水に乗るゴマフアザラシやクラカケアザラシなどの海獣類を撮影する機会も比較的多かったそうです。しかし近年では、2月下旬から3月半ばにかけての限られた短期間しか流水が到来しません。これも気候変動の影響である可能性が高いとのこと。流水というと、一般には観光資源と捉えられるかもしれませんが。しかし流水が海面を埋め尽くす（氷で蓋

がされる）ことによって海からの水蒸気が上がりづらくなり、結果的に気候が穏やかになるという重要な効果があります。また流水のおかげで波が穏やかになるため、ゆっくりと成長する養殖ホタテ貝などが守られるという役目もあるのだそうです。流水の到来時期が遅かったりその量が少なかったりすると、海面が荒れて水中がかき混ぜられて稚貝が弱ってしまい、結果的には漁業にも悪影響が及ぶのです。自然を巡るさまざまな要因がこのように密接に関わっているという事実も、今回のセミナーの重要な指摘事項でした。

今回は一般市民の皆さまにも参加いただけるよう、土曜日の18時30分から20時という時間帯に設定しました。その結果、学生や教職員の皆さまに加え、道内各地からの参加があり、遠くは東京都、千葉県、奈良県などからもお越しいただきました。

貴重な作品の数々と示唆に富むお話をご提供いただいた関さんに、この場を借りてあらためて御礼申し上げます。誠にありがとうございました。



写真 1：流氷の上のアザラシ親子



写真 3：タラバガニのピラミッド



写真 2：流氷の下にゆらぐ昆布



写真 4：流氷の恵みを受けて育つ毛ガニ

写真提供：関勝則氏